

1968年にVARIIGブラジル航空が日伯間直行便を開始した際、CMソング制作を依頼された私は当地の新聞広告で見た「近くなった日本」というキャッチ・フレーズにヒントを得て、昔話「浦島太郎」をテーマに取り上げました。日本へ帰る浦島が竜宮の乙姫からもらった玉手箱を開けたら白い煙の代わりに日伯間の往復切符が出てきた、という筋書きです。

作曲はカーニバル・ソングのヒット・メーカーとして有名なアルキメデス・メシーナ、歌は当時日系社会のトップ・シンガーだったローザ・三宅、そして私が作詞と編曲を担当してテレビ映像はアニメに決まりました。

コミック・ソング風なのに移民の哀愁あふれたメシーナのメロディーは非常に印象的で人々が口ずさむようになり、翌年のカーニバルには全国のダンスパーティーで大ヒットとなりました。

浦島太郎 ー VARIIGブラジル航空CMソング（1968年）

作詞：坂尾英矩／作曲：アルキメデス・メシーナ

昔 昔 浦島は

助けた亀につれられ

ブラジルにやって来て

住み心地の良さに国を忘れ

住みついた

ふと国が恋しく

いとまごい お別れにと

プレゼントしてくれたのは玉手箱

開ければびつくり その中には

日本まで往復切符

さっそく飛んでった

半世紀前、横浜のヨット・クラブで知り合った駐日ブラジル大使令嬢  
ヴェラ・メンデス・ゴンサルヴェスがとても可愛かったので「君は乙姫  
様のように美しい」と私が言ったら、彼女は「ありがとう、でもあたし  
なんかブラジルではブスなのよ」とニッコリ答えました。この一言に  
すっかり魅惑された私は、取る物も取りあえず亀（船）に乗って渡伯し  
たのです。

考えてみれば、大使令嬢の言葉は「ブラジルへ行って日本へ戻るつも  
りなら開けないように」という意味の玉手箱だったのでしよう。箱を開  
けた私は、いつの間にか当地で白髪となってしまうました。

今ここに日伯移民百周年を迎え、私は日本の皆様へ本書を玉手箱とし  
て差し上げたい気持です。往復チケットは出てきませんが、ブラジルと  
いう竜宮の一面を楽しんでいただければ幸いです。

2008年6月 サンパウロにて

坂尾英矩

（「情熱のリオ」のまえがきより）